丹波夜能

三枝和子

丹波夜能

三枝和子

中央公論社

丹波夜能

定価一二〇〇円

昭和五十八年十二月十日印刷
昭和五十八年十二月二十日発行

著者　三枝和子
発行者　高梨茂
印刷所　三晃印刷
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
©一九八三　検印廃止
ISBN4-12-001262-X

目次

丹波夜能　5
操り夜人形　67
ゴンザの裁き　99
アリスは年に一度来た　155

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

丹波夜能

裝
幀
司
修

丹
波
夜
能

遠くで、微かな物音が聞こえた。耳を澄まし、息を止めて、じっと待っていると、かちり、と、ほんとうに、薄い銀盤の上に針が落ちるほどの音なのだ。それでいて、細くはっきりと際立っている。

常子は姿勢を正して、その音を聞きとろうとしていた。

空には薄あかい新月が浮かび、夕暮というには遅く、夜というにはまだ早い時間だった。観客席はざわめいていたが、そのざわめきを貫くように、さっきからひとすじの音が流れて来るのだった。

音は神社の社務所の向うあたりからだ。音は周囲のざわめきとは全くちがった世界の何かであるらしく、かちり、かちり、と、まるで時を刻むみたいに響いて来る。

誰だろう。扇子を開いたり閉じたりしている——。

それからしばらく、今度は、追っかけるようにして鋭い笛の音。ぽん、ぽん、と柔らかに小鼓を打つ音も混って来る。

常子は静かに目を閉じている。

——とうとう辿りついたわ。

それは、長いあいだ、待ちのぞんでいたもののようでもあり、また、長いあいだ、避け続けて来たもののようでもあった。どちらとも、自分の気持のなかでは判然としないものであったが、とにかく一つの決心だった。

常子は、離婚しようと思っていた。演能が終ったあと、夫にそれを打明けるつもりだった。

そのジーゼル・カーが大阪駅を出発してしばらくすると、石上高久は奇妙な感覚のなかにおちこんだ。

窓外の景色が、見馴れた東海道線沿線のものでなかったせいかも知れない。いきなりひらけて来た田園風景と、予期しない場所に立っているかかしに一瞬ぽかんと目を瞠った。

——いったい、どこへ連れて行かれるんだろう。

「ねえ、お能を観にいかない？　ちょっと変ったところなの」

最初、妻の常子が誘ったときは、突然だったので何のことかよく分らなかった。

「お能？　お前、そんなもの観るのか」

「ええ。好きなの。時々行くのよ」

「ひとりでか」

「そう」

——結構な御身分だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しかし口には出さなかった。言うと、必ず反論されることは目に見えていた。あなただって、宴会や旅行や、仕事づきあいと言いながらもお仕事以外に楽しいことがいっぱいあるでしょ、主婦には何の娯楽もないのよ。

だから口を噤んでいるに限る。

石上高久には、いまだに妻の常子の行動によく分らないところがある。よく分らない、と言っても、そんな大袈裟なことじゃない。突然、ある日、わたし、仔猫拾って来ちゃった、可哀そうだから飼ってやるの、と子供染みた行為に及ぶかと思うと、高速道路用地接収反対運動のリーダーだったりする。それがいつも石上高久自身の知らない場所で起って事後報告される。仔猫と反対運動とは質の違う問題だから、反対運動の方は相談してほしい、と思うのだが、常子の意識のなかでは、二つはどうやら一連なりのことらしい。

「何故、突然、お能に誘ったか、分る？」

常子は買って来た駅弁の紐をほどいて石上高久の膝の上に載せる。

「理由があるのか」

「ええ」

「……」

「わたしたちね、今年で結婚二十五年なの」

「へえ、そんなになるのか」

「忘れてたでしょ。銀婚式のことなんか」

「じゃ、これは銀婚旅行か」
「まあね」
「銀婚旅行なら、そう言ってくれれば、日帰りなんかにせず、ちゃんと旅館をとってゆっくりしたのに」
「……」
常子は、飲みかけたお茶を途中で止め、ちらっと石上高久の顔を見上げ、首を振る。
「大丈夫よ、気をつかってくれなくとも」
「気をつかってるわけじゃない」
それから石上高久は言葉につまる。常子が、ふっと摑みどころなく遠くなっていく感じだ。此の頃、時折、常子のこんな表情に出会う。
いつだったか、嫁に行った娘が初孫を連れて帰って来たときも、孫をあやしながら、ふっと途方に暮れたような眼をしていたことがあった。
石上高久にとって、常子は後添いの妻である。三十三歳のとき、先だった妻が遺した四歳と二歳の二人の子供を連れて再婚した。常子は二十八歳だった。当時としては少し遅れていたが、自分の条件を考えて、石上高久は、この縁談が成立したとき、意外な気がした。だって、貰って下さるって方があれば、どこへでもいく気だったわ、あの頃——、と常子は笑った。
二人のあいだに子供をつくらない方針は、常子の方から打ち出した。私が生さぬ仲で育って辛かった経験から、自分の子供のいない方がいっそうまくいくと思うの。

そう最初から決めこんでしまうのもどうかと思ったが、しかし石上高久は、何も言わなかった。そのうち常子の気持が変れば、それはそれで良し、と考えていた。

常子は一生懸命二人の子供を育てた。自分の子供と変りなかった。自分の子供よりも一生懸命育てた、と言えるかも知れなかった。それに実際の話、二人の幼児のいる母親として、三人目の子供のことを考える余裕もなく常子は暮して来たのだ。二人の子供が長じて、それぞれ常子が実の母親でないと知っていったとき、それぞれに示した敬愛の感情に、石上高久は、やはりこの方針で良かったのかも知れぬ、と納得していた。

「どうしたの、急に黙りこんで」

食べ終った駅弁を片付けながら常子が言った。

「いや——」

石上高久は、自分の気持を常子にどう伝えるべきか分らなくて口ごもった。息子と娘がそれぞれに結婚して家を出て行ったときにも言いそびれた。感謝の気持を言葉にすることが逆に隔てをつくるような気がしたのだった。

「このひとの『道成寺』を観たことがあるの。いつだったかしら。十年くらい前ね。東京で——。あのとき、何しに東京へ行ったのかしら」

「……」

「誰かの結婚式だったのよ。誰の結婚式だったか、忘れてしまった。そのくせ『道成寺』のことは覚えている。素晴しかったわ」

「……」

このひとの、と言われても、能に関して全くの無知である石上高久には何のことやら分らない。手許にあるチケットには、

舞囃子　融　梅若万紀夫
狂言　止動方角　茂山　千作
能　卒都婆小町　桜間　道雄

と印刷されてあるだけだ。場所は丹波篠山、春日神社能楽殿。「伝統の舞台に東西人間国宝の至芸」と謳ってあるからには、いずれ由緒があるのだろうが、その辺の事情も知らない。とにかく大阪から急行で一時間十五分もかかる山峡の町にわざわざ引っぱっていかれて、そこで能を観る、という趣向が、石上高久には理解しかねた。

いいの、今回は黙って従いていらして、と常子は浮き浮きと命令した。昨年の暮に息子が結婚し、初老の夫婦二人だけの生活になって以来、初めてといっていいくらいのはしゃぎようだったので、これを断ると妻がひどく落胆することが目に見えていた。

窓外は北へ進むにつれて、次第に稲田の黄色が濃くなっていった。さすがにまだ刈入れは始まっていないが、北ほど収穫の時期の早いことが列車の動きと共に見えて来る。稲田と稲田のあいだには、ところどころ彼岸花が真赤に咲いていた。彼岸花の咲いているあたりに、格別、秋の陽差しが強く感じられた。

「――」

石上高久は目を閉じた。食後の軽い睡気のなかで、うつらうつらと考えごとを続けた。石上高久は今年定年だ。定年後の再就職は順調に進んでいた。何も生活に困るわけじゃありませんもの、もう家でゆっくりなさってたら、と常子はすすめてくれたが、まだまだ老いこみたくはない気持が強く、昔の友人たちに依頼してあった大学の非常勤講師の口が殆んど決定していた。大手企業からの横すべりが歓迎される私学で、余り聞こえはよくないが、しかしこれなら常子も文句を言うまいと思う。常子が再就職を嫌うのは、多少の生活の苦しさは我慢しても、みじめな仕事に夫を追いやりたくない誇りからにちがいないと察しがつくからだ。

常子は「道成寺」の舞台のなかにいた。

以前、『今昔物語』の「紀伊国の道成寺の僧、法華を写して蛇を救ひたる話」というのを読んだことがある。これは若後家が自分の家に宿をとった旅の美僧に思いをかける話である。女は僧の寝所に忍んでさまざまに誘惑するが、宿願ある身と断られる。しかし女は怯まない。僧は仕方なく、宿願成就の帰りに再び戻って来て会うことを約束するが女をなだめる手段で本心ではない。帰りはこっそり別の道を通って逃げる。待ちくたびれた女は往来に出て人に尋ね歩いているうちに例の美僧の逃げたことが判明する。怒った女は家に引っこもって間もなく死ぬ。そのとき女の引っこもった寝屋から十米もあろうかという大蛇が這い出して来て、僧の後を追う。僧はこれはたまらぬと道成寺に逃げこみ保護を求める。道成寺では次第を聞いて、釣鐘を下ろし件の僧をそのなかへかくまう。しかしそんなことで大蛇は怯まない。閉じた門を乗り越え、鐘をぐるぐる巻

きにした。しばらくそうしているうち、大蛇の両眼から血の涙が滴り落ちたと見るや、すごすごもと来た道へ帰って行った。道成寺の僧たちがそのあとを見るに、釣鐘は焼けて、あの美僧は骨も残らず灰になってしまっていた。

説話だから、このあと、殺された美僧は女と同様蛇になり苦界におちて、道成寺の老僧に供養を頼む。老僧が法華経を写経し、一日の法会を修したおかげで、二匹の蛇はそれぞれに善所に生まれ変る。

常子の気性として、この話はおどろおどろし過ぎてぴったり来なかった。女が自分から無理矢理迫って、逃げられると追っかけて殺す、というのは、どうもいただけない。その点、能の方が理解できた。

能の「道成寺」は、この説話をもとにして出来たらしいが、女が強引に口説くという筋立てではない。女は少女のとき、自分の家に毎年宿泊する奥州からの山伏を、父が冗談にお前の婿だよ、と告げたのを信じ、ひたすら男が申し込んでくれるのを待って暮す。しかし何年経っても男は申し込んでくれない。女は、遂にしびれを切らして自分から言い出す。驚いた男が逃げ腰になるいきさつは説話と同じで、こうした過去を踏まえての道成寺の鐘供養に、白拍子になった蛇がやって来て、踊りながら最後に鐘にとりつき正体を現わすが、僧たちの経に祈り伏せられるという筋立てである。

この少女の心の傾きに、常子は自分に近いものを感じる。父の気持も、何だかよく分るように思える。父は冗談を言ったのだろうが、嘘から出た真、みたいなものを望んでいたかも知れない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com